

はつぎくら／その年の春、初めて咲く桜のこと。一輪二輪、枝に咲いている姿は初々しく可憐である。心待ちにしていた開花を喜ぶ気持ちが「初」という文字に表れている。

らしく

自分らしく、
粋なくらし

CLOSE UP

にぎわい創出で「わがまち」を活性化

エキキタまちづくり会議

広島陸の玄関にふさわしい活気あるまちへ
地域一丸となり、継続して取り組む

猿猴橋復元の会

大正ロマン漂う橋の復元が、
にぎわいあるまちづくりのきっかけとなる

千田わっしょい祭実行委員会

かつての学生のまちが毎月祭りを開催し、
新たな地域のにぎわいを生む

連載

- ▶らしくっくレポート ひろ記者が行く・光り輝く高齢者が、古墳出土の山麓の「かくれ家」で遊ぶ!!
- ▶らしくっくコラム・with-withな地域 ▶ようこそ!勤労青少年ホームへ〜広島市勤労青少年ホーム〜
- ▶人材バンク 名人 宝人 達人 ▶Hmi助成支援団体のご紹介 ▶情報の森 ▶プラザ通信



広島陸の玄関にふさわしい活気あるまちへ 地域一丸となり、継続して取り組む

広島駅南北自由通路開通時の様子

CLOSE
UP

にぎわい創出で「わがまち」を活性化

魅力あるまちづくりを進め、さらなるまちのにぎわいを創出するためのさまざまな活動をしている団体を紹介します。

エキキタまちづくり会議

<https://www.facebook.com/kitemiteekikita/>

住民、企業、行政が連携して行うまちづくり

広島駅新幹線口周辺地区（通称エキキタ）の住民団体や、企業、行政などが連携して一体的なまちづくりに取り組むことを目的に、平成27年3月「エキキタまちづくり会議」は発足しました。

24もの団体から構成されているこの「エキキタまちづくり会議」の住民団体の中心的役割を担っているのは、エリア一帯19の町内会を束ねている尾長地区連合町内会会長の山城政之さんです。



▲ 山城政之さん

「このエキキター帯は、江戸時代に西国街道の入口として栄え、今も二葉の里歴史の散歩道としてその名残をたどることができます。しかし、時代が移り変わる中、いつの間にか広島陸の玄関と言え、南口を指すケースが多くなっていました。そのような中で、広島駅新幹線口のリニューアル、

若草地区の再開発事業、二葉の里地区の新規施設の集積の事業計画等のタイミングが合い、私たち住民もチャンスと捉え、“広島を代表する地区に成長させたい”という思いのもと、住民や企業、行政が一丸となってまちづくりに取り組む事になりました」。山城さんは、当時をこう振り返ります。

区画整理事業等完成後も、 継続してまちの魅力を発信

団体発足後、「つどう」「活かす」「安全・安心・快適」「自立する」「つながる」の5つの柱を策定し、それぞれの目標を定め、プロジェクトをスタート。

食・人・モノを通じて情報発信をする代表的な例としては、平成27年から毎年続けられているエキキタ・スイーツラリーがあります。エキキタの魅力あるスイーツのお店を堪能してもらうスタンプラリーで、参加店舗や訪れる人も年々増えているそうです。また、平成29年夏からは、毎月第3木曜日の朝、加盟団体や地域の事業者によるエキキタエリア内の街区公園等の一斉清掃活動も実施。



▲ 一斉清掃活動の様子

街区のシンボリックな場所である「シリブカ公園」（二葉の里第二公園）に、各団体から約100人が集まって、近隣の清掃活動を行っています。この他にも、平成29年10月の、広島駅南北自由通路全面開通時に、自由通路をはじめ、街区公園や緑道を使ったイベントも実施するなど、さまざまな取り組みを行っています。

「活動を始めるまでは、広島駅に隣接し歴史あるまちなのに、このまちの将来に不安を抱えていたのが正直な気持ちです。しかし、住民、企業、行政が思い描く方向が一致し、いざプロジェクトが始まると、まちが良い方向に変わっていくのを実感。今では、日々変わるまちの姿にワクワクしています。だからこそ、このプロジェクトは、建設計画されている施設が完成しても終わりじゃない。むしろ、そこから勝負だと考えています。継続して、まちを盛り上げていかなくちゃいけないです」と山城さん。広島駅南北自由通路が開通し、人の流れが変わりつつある中で、次の一手についてもメンバーが継続して検討中。より活気あるまちづくりを進めていくために、趣旨に賛同してくれる多くの人たちの参加が必要になると考え、エリア外の団体との連携にも積極的に取り組んでいます。

「往來の交流」「歴史・文化の交流」「交通の交流」など、これまでさまざまな交流によって育まれてきた、このエキキター帯。今回の開発等で、“新たな交流”も生まれています。エキキタだからこそその地域性や資源を活かし、季節毎にさまざまなイベントを行うなど、にぎわいの創出を続けていきたいですね。自分が住むまちだからこその熱意と愛情、そして行動力を持って、まちづくりに取り組むその姿に、大きな力を感じました。



▲ エキキタ・スイーツラリーの案内

※掲載している各団体への問い合わせは発行者である（公財）広島市文化財団まちづくり市民交流プラザまでお願いします。☎082-545-3911

らしっく contents

Vol.50
初桜号
2018.3

特集

01 にぎわい創出で「わがまち」を活性化

- ▶ エキキタまちづくり会議
- ▶ 猿猴橋復元の会
- ▶ 千田わっしょい祭実行委員会

05 らしっくレポート ひろ記者が行く

- ▶ 光り輝く高齢者が、古墳出土の山麓の「かくれ家」で遊ぶ!!

らしっくコラム

- ▶ with-withな地域
広島修道大学 人間環境学部／ひろしま未来協創センター
木原 一郎 講師

06 ようこそ！勤労青少年ホームへ

- ▶ 広島市勤労青少年ホーム

07 人材バンク 名人 宝人 達人

- ▶ 絵本たねまき塾
- ▶ 悠久の会

09 Hmi助成支援団体のご紹介

- ▶ 白い杖SOSシグナルをひろめる会 広島
- ▶ 特定非営利活動法人ひろしま相続・後見サポートセンター
- ▶ 特定非営利活動法人NPO狩留家

11 情報の森

15 プラザ通信



【表紙写真】緑道でのイベント「エキキタカラフルマルシェ」の様子

大正ロマン漂う橋の復元が、にぎわいあるまちづくりのきっかけとなる

猿猴橋復元の会

思いもよらない広島市の被爆70年事業としての猿猴橋復元

広島市南区的場町の猿猴川に架かる猿猴橋。歴史は古く、およそ400年前の毛利輝元の広島城築城までさかのぼります。その猿猴橋を戦前の姿に復元し、まちのシンボルとして、にぎわい創出に取り組もうと、平成20年7月に発足したのが「猿猴橋復元の会」です。

大正15年に、木造の橋から当時のあらゆる人知と技術を結合させて造った現在の形の鉄筋コンクリートの橋は、大正ロマンの結晶ともいえる親柱に鷹をあしらった立派な装飾を施した橋だったと、「猿猴橋復元の会」の会長大橋啓一さんは当時を知る地元の人から聞いていたそうです。「しかし、第二次大戦が始まると金属類回収令によって、欄干などすべての装飾品が供出され、以来橋はそのままになっていました。時は流れ平成19年に地元の人から、猿猴橋の復元を考えてみては、といった意見が出されて、「猿猴橋サミット」と銘打った復元に向けた会議を開いたのが活動のはじまりです」。



▲ 大正15年渡り初め式の様子

猿猴橋サミット開催後、広島市立大学の吉田幸弘准教授による復元CGを作成し発表。その後、新聞で戦前の橋の姿を捉えた写真が報道されると、復元に向けた動きが加速します。平成21年に、まず親柱をモニュメントとして設置する運動をスタート。寄付金を募る活動を行うとともに、広島市に対しては橋の復元を働きかけました。

平成26年に広島市が被爆70年事業の一つとして、被爆橋梁で



▲ 大正15年の猿猴橋

ある猿猴橋の復元を検討している事がわかり、大橋さんをはじめメンバーは驚いたと言います。「当初は、親柱をモニュメントとし設置する事が、その後の復元の機運を高める事に繋がると考えていたら、一気に復元の話が浮上してきたんです。モニュメントのデザイン変更も余儀なくされましたが、うれしい悲鳴です」。

復元は終わりではなく、にぎわい創出のはじまり

平成27年夏に入ると、復元に向けた工事がスタートし、平成28年3月、猿猴橋は戦前の姿に復元されます。復元されたのは、四隅の親柱に設置された地球儀をつかんで羽ばたく大鷹の像と、欄干の桃を掲げる2匹の猿の装飾など。



▲ 復元された地球儀をつかんで羽ばたく大鷹の像

「無事に復元を終えて感無量でした。会としての役割は、これで終えたと思っていましたが、完成したから終わりではそれまでです。これをまちのにぎわい創出の柱にして、もっとまちを盛り上げていきたいと思い、橋の渡り初めを中心とした、祭りを開くことにしました」。会のメンバーを中心に、新たに「えんこうさん実行委員会」を設立し、3月に復元完成記念の祭り「祭りえんこうさん」を実施。近隣の専門学校と協力し関連イベント等も行いました。平成29年3月も「祭りえんこうさん」は猿猴橋を中心とし開催され、今後も継続していく予定です。

「猿猴橋は、橋が造られた当初は、広島城下の西国街道に架かり古くから交通の要衝でした。大正時代に架け替えられた時、親柱上部に“吉祥(吉の上、めでたいしるし、良いきざし)”の意味を込めて、二様の鷹が配置されていたそうです。これからは吉祥にあやかって、猿猴橋を基点に周辺に人が集まってくるような、うねりをつくっていききたいですね」と大橋さんは語ってくれました。一本の橋の復元が、まちが大きく変わるきっかけとなり、今後どのようなにぎわいが生まれてくるのか楽しみです。



▲ 平成28年3月渡り初め式の様子

かつての学生のまちが毎月祭りを開催し、新たな地域のにぎわいを生む

千田わっしょい祭実行委員会

<https://www.facebook.com/sendawasshoi/>

大学祭から、県内随一のフリーマーケットを擁するイベントに成長

広島市中区東千田町の東千田公園(広島大学本部跡地)を利用して、毎月フリーマーケットを中心としたイベント「千田わっしょい祭」を開いているのが、「千田わっしょい祭実行委員会」です。



▲ 山根進さん

「昭和57年、広島大学工学部が広島市に移転したのを皮切りに、各学部が次々と移転。しばらくすると、一部の大学関係者や、地元千田町の住民たちの間から、学生が居なくなることで、まちが寂しくなる、と言った声が聞かれるようになりました。そうした声に応えるように、地元千田町の住民がまちのにぎわいを取り戻すために平成5年から、移転していない学部の学生を中心に「千田祭」と名付けた大学祭を3年連続で開催したんです」と語るのは、会のまとめ役の山根進さん。

平成7年に、夜間部の千田キャンパスでの存続が決まると、学生と地域住民が一体となりまちづくりに貢献できないか検討。大学祭「千田祭」は平成8年5月に、千田公園(広島大学工学部跡地)を会場にして、学生、住民、行政が連携した地域の祭りとなりました。

さらに平成10年8月からは、広島市の協力も得て毎月開催となった後、千田公園から現在の東千田公園に場所を変更。周辺の再開発が進む中、全盛期の1/3のスペースではありますが平成30年3月現在、開催回数は344回を数えています。



▲ にぎわうフリーマーケットの様子

一過性ではない昔ながらのコミュニケーションも

「祭りの基本は、さまざまなものがたくさん集まったフリーマーケットで、毎回50〜70店が出店。また、歌謡曲やJAZZを演奏するプロのミュージシャンがステージを繰り広げています。さながらまちの大学祭といった感じです。今は冬場と夏場は月1回ですが、その他は月2回開催が基本で、年間20回開き、毎回約3,000人來られます。祭りを支えるボランティアのスタッフも、毎回朝早くから駆けつけて支えてくれています」。



▲ 第300回記念(平成27年12月)

かつては1〜2万人規模のイベントとしてにぎわったこの「千田わっしょい祭」。近隣の環境の変化などもあり、訪れる人は減少しているものの、山根さんをはじめ、祭りを支えるスタッフの皆さんの熱意が、25年以上も続く大きな原動力となっています。

「商店街などの店舗が減少していく今の時代、このわっしょい祭には毎回、衣料品や、日用雑貨などのさまざまなジャンルのお店が出店。近隣住民をはじめ、皆さん市内各所から楽しみにやってきました。出店者も、リピーターのお客さんと顔馴染みになってコミュニケーションが生まれています。新たなコミュニティができ、昔ながらの人と人との交流がここにはあるんですね。過去、何度もやめようとも思いましたが、ここにやってくる人たちが喜び、楽しそうな顔を見るとやめる気持ちが無くなるんですよ。今後も、可能な限り続けていければ」と、山根さんは語ってくれました。今もお開発が続いている市内中心部で、長年続けられている活動に、まちの発展を願う人々の熱い思いを感じました。



▲ ミュージシャンによるステージの様子